

## 平成 22 ( 2010 ) 年度「NGO 長期スタディ・プログラム」最終報告書記載項目

提出日：2011 年 3 月 20 日

氏名：濱坂 都

所属団体：特定非営利活動法人ジェン

受入先機関名(所在国)：GIA リーダーシッププログラム(スリランカ)、BOSCH Foundation 他 (インド)

研修期間(全体)：2011 年 1 月 15 日 ~ 2011 年 2 月 16 日

研修テーマ：新規プログラム開発、組織力強化のためのトレーニング

新興国ビジネスを立ち上げるにあたり必要となる貧困コミュニティとの発展的な協働を成功させるために、NGO の視点を企業の視点とマッチングさせるスキルの習得

全体研修目標：

1. 事業拡充(提案型事業)に向けた、ステークホルダーとのイノベティブな関係構築
2. 人材の効果的な登用と能力向上につなげる組織運営のスキルを学ぶ
3. 企業との長期的かつ発展的な協働は、活動の新たな核となる。支援の枠組みにとらわれない、イノベティブなプログラム構築を学ぶ

具体的な研修内容：

1. GIA(Global Leader, Innovative, Authentic)リーダーシッププログラム、ビジネスを通じて社会課題解決に取り組む新しいリーダーを育成するためのプログラムに参加。新興国(スリランカ)でフィールドワークを行い、行政、企業、現地 NGO との会合を通して、新市場開拓の担い手、組織に反映するための新しい視野・発想を学んだ。
2. 収入創出、職業訓練に特化しているインドの NGO、複数団体への視察を通し、実態と課題を学んだ。

研修の成果：

1. スリランカ：  
・研修参加者 8 社 13 名。視察予定地だった東部バティカロア地域の大洪水に伴う直前の行程変更にもかかわらず 23 団体(企業、行政)を視察。行政との会合では、主に戦後復興計画とその方向性について意見交換を行った。企業との会合では、復興ビジネスへの日本企業の参入を強く訴えられた。共に、リーダーから復興への意欲と取り組む姿勢とぶれない方向性を学ぶ機会となった。また、JEN について、スリランカにおいて、認知度が高いことに感銘を受けた。活動紹介と事業方針について、熱心に耳を傾けてくれた。

- ・滞在中、英字新聞の第2面に日本の復興支援が取り上げられた。そこへ JEN の活動が紹介されるなど、日々、メディアで JEN が紹介されていることから、同国内における団体の認知度が高いことがわかった。
- ・政財界のリーダーとの会合で、全員から日本企業の入札頻度、消極性への批判を浴びた。一方的な論理であると感じたが、話を聞くにつれ、他国との競争力の低さ、具体的には入札の争点が最先端技術ではないことを知る事になった。具体的には、そこそこの技術で、安価であること、が重要だということを学んだ。
- ・電気、水道が引かれていない村でのホームステイで最貧層の生活を体験。最貧層に根差したビジネス発掘のための多くのヒントを得た。参加者にとって貧困地域における市民組織の存在、人びとのエンパワメントを地域主導でおこなっているその価値を、NGO 運営による学校への訪問やホームステイ体験を通して理解する機会となった。
- ・本研修において、当初 東部視察の中で JEN の支援地域を訪問し、現地スタッフから事業方針について説明を受ける研修が組まれていたが、洪水のため訪問不可能となった。一方、南部ハンバントタ訪問時に、予定に組み込まれていなかった JEN の元受益者訪問を急遽行程に組み込んだ。その結果、津波被災者の復興 特に生活環境の改善について、ひとりひとりの努力を聞く機会を得られた。また、JEN の事業方針については、ハンバントタへの道中、研修生に対し、濱坂から様々な角度で説明することができた。研修生の NGO の活動への理解を得る機会となった。

## 2. インド

- ・当初、企業と NGO の協働事例を研修テーマにしていたが、実現できなかった。希望していた企業と意見交換を行う中で学んだことは、たとえ 10 年に及び貧困層向け商品の開発をおこなっていても、チームは本業の上に開発チームを構成しているにすぎない、ということだった。本業以外のイニシアチブとして取り組んでいるため(営利性がみえないためとのこと)独立した部門がなく、故に日々の業務がないことが受け入れ不可の理由だった。そのため、研修の目的を変更し、急遽、NGO が実施している自助努力を促す活動、職業訓練を学ぶことにした。インドを選択した理由は、NGO 活動が活発であること、機会があれば、企業と NGO の協働を視察できると判断したため。
- ・「紹介」がないと、とりあってもらえないことが受け入れ組織、訪問予定を決定するにあたり障壁になった。そのため、現地に到着してから、既に情報交換を行っていた BOSCH 財団および、Oversea Women's Society を介して、NGO へのアポイントメント取りを行った。現地で認知されているフォーカルポイントを紹介することで、驚くほど多くのアポイントがとれた。後に、各 NGO での意見交換の際、政府への賄賂の強要などから、見ず知らずの人への不信感が深く根付いていることを知った。
- ・NGO を主宰する個人の多くが海外在住経験者だった。海外に居住する事で見てきた祖国の貧富の差に問題意識を抱き、活動を始めたという人が多く、特に、女性が積極的だと感じた。
- ・活動資金を個人の寄付に頼っていることから、少額で小さな支援に特化しているところがほとんどだった。
- ・行政の助成金を使わない理由は、柔軟性にかける、手続きに時間がかかる、また、承認がおりるまでのあいだに、担当官へ賄賂を手渡さなければいけない「慣習」があるから、とのこと。そのため、より緊急性より柔軟性を求める NGO 活動は、自己資金で行うとのこと。資金調達に困難を抱えつつ、規定に縛られず理念に沿った活動を継続していることを皆誇りにしていた。JEN の寄付プログラム、ステークホルダーとの関係構築について説明させてもらった。

・一方で、支援活動と企業活動の橋渡し役となっているマイクロクレジットの効果を見る機会があった。4地方20地域で349支店を展開するマイクロクレジット銀行「Ujjivan」の系列 NGO「Parinaan」は、活動地域を共有している。融資を受けている人びととその家族が、この NGO が主宰する学校に通えたり、衛生教育、貯蓄の方法をはじめ、一般教養を学ぶ機会を得ている。農村部での活動のみならず、都市部のスラムにも同様のアプローチで活動している。都市部のスラムに居住する人たちは、そのほとんどが農村部出身者なため、無計画に都市部に移住するも、農繁期には村に帰る生活を送っているとのこと。農村部と都市部を共に活動地域にしていることで、参加者の日々の動きも可視化しているとのこと。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法：

・新興国で長期にわたり効果的な活動および、自活にむけた支援や事業を構築するには、活動の透明性の可視化と現地の「人脈」との信頼関係といった協力関係に多くをゆだねることを、改めて学んだ。支援の終了から自活への速やかで発展的な移行の手段として、実際に IT 企業がコンピュータースキルの訓練を支援するパターン（ホープ財団）のように、企業を巻き込んだ OJT 的な職業訓練が効果的であると学んだ。

・インドでは、貧困層の社会復帰にむけた手段を重点的に視察した。今後、JEN が支援を終了する際に、例えば最後のプロジェクトとして企業と連携した職業訓練を行い、心のケアと自立の活動をより社会生活に役立つ支援としたいと考える。これは、支援の効果をよりわかりやすく伝える役割もあると考える。

・研修期間中に会った現地の専門家、有識者とのネットワークを、今後の発展的な自立の支援事業に活かしたい。

・企業の社会貢献担当以外の社員と意見交換を持てたことも大きな収穫だった。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等：

・速やかでご親切な対応に感謝しています。

・研修先を選定するにあたって、助言を得られなかったことが残念でした。

・資金補助について、もう少し柔軟であると、もっと効果的な研修計画をたてられると感じました。特に、研修コースの場合、先進国の著名な機関であれば、その額は高額で、もたらされる効果も高いと考えます。

その他：

以下、写真添付

以上

意見交換

<スリランカ>



元首相、現 e-government 担当、国土交通省大臣、Laxshman Sereviratne 氏より、スリランカの政治体制についてヒアリング。(コロンボ)



スリランカ中央銀行にて、チーフエコノミスト、経済研究所部長の K.D.Ranasnghe 氏より、金融政策についてヒアリング。(コロンボ)



キャピタルマハラジャ会社の代表、Kili 氏と、経済復興についてのビジネスプランについて、ヒアリング。(コロンボ)

<インド>



ホープ財団:(中央)CEOイアン・コレラ氏、(左)ジョイス・コレラ氏、(奥)ジェシー・フー(BOSCH 財団)、(手前)濱坂



S.E.M.A (Society for Empowerment and Mobilization of Artisans)の工房にて、事務局長のアラティ・ヒレマルト(左)と。(ダルワール郊外)



Parinaan:(左から2番目)事務局長イレーヌ・マリーと  
(右端)プロジェクトオフィサー、ロシャン

異なる社会に属する人々との出会い  
<スリランカ>



マハボディソサエティ(世界仏教結社)にて、僧侶タ  
ンガラ氏より、仏教の教えについて学ぶ (コロンボ)



レラバナワ村の小学校訪問。子どもたちによる歓迎(ト  
リンコマレ郊外)

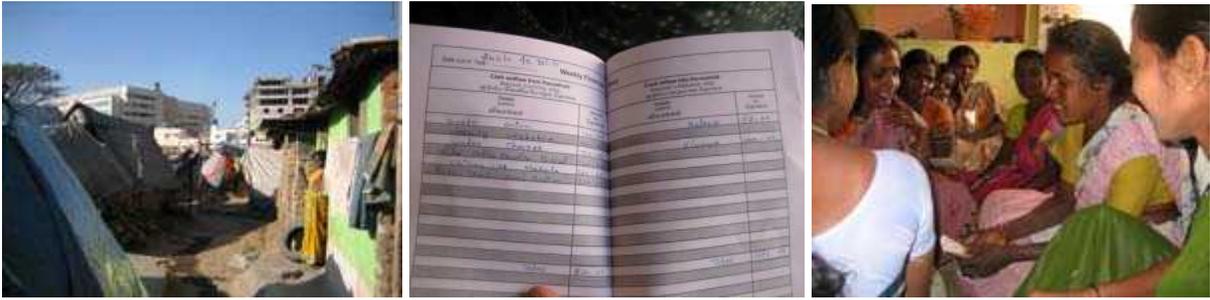


ハンバントタ港の工事現場にて、中国側企業の担当  
者と対談(ハンバントタ)



津波被災者(JENの元受益者)訪問、ヒアリング。(ハ  
ンバントタ)

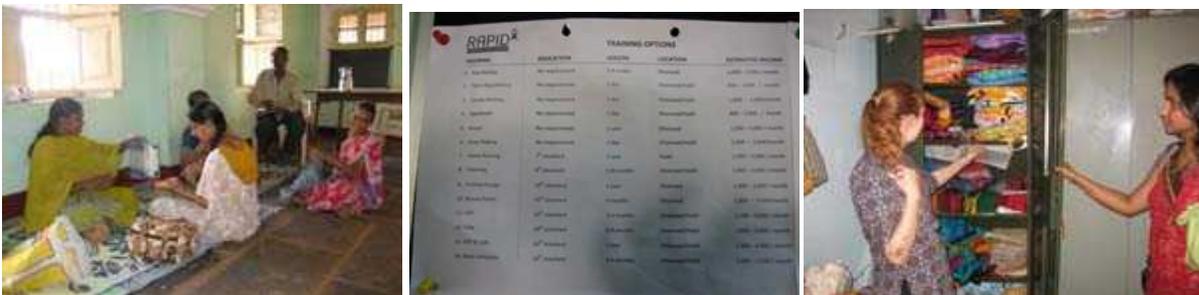
<インド>



Parinaan: 写真上左から: バンガロール市内のスラム。25年間、この状態。近々取り壊されることが決まったという。受講者に配布している家計簿。ワークショップの様子。(バンガロール)



Belaku Trust 写真上左から: バンガロールの事務所。フィールド視察、ブロックプリント工房。手漉き和紙工房 (バンガロール郊外のカナカブラ村)



RAPID:職業訓練に参加している女性たち。どんなスキルがどんな収入になるのか、目安を示した表が壁に貼られている。アメリカから長期ボランティアが駐在。(ダルワール)



EquipIndia: 写真上左から:入口、4 エーカーの敷地は周囲を綿花畑に囲まれている。構内の見取り図。寄宿施設も併設。  
写真下左から: 足の不自由な女性がミシンで縫製。(フブリ)

雑感

<スリランカ>



(左)移動中は、コーディネーターが地図を用いて説明。(右)ハンバントタ周辺の道は、舗装されていないが工事用車両で溢れている

<インド>



(左)ホープ財団が運営するコンピューター教室は、各地域の雑居ビルの中にある。  
(右)ベラク・トラストの事務所。住宅を事務所に行している。(バンガロール)

様式 6



(左)ダルワールの景色。砂漠化が進んでいる。

(右)ベラク・トラストの職業訓練工房。悪臭や、ゴミが散乱することはないが、トイレがないことに驚いた。(カナラプラ村)